

中学校国語科における編集学習の動向と課題

—「編集力」の三要素に着目して—

渡邊 光輝

千葉大学大学院教育学研究科修士課程・千葉大学教育学部附属中学校

近年、「編集」の概念が大きく拡張され、高度情報化社会における情報活用能力としての「編集力(エディターシップ)」に注目が集まっている。そこで、本研究では、中学校国語科において今まで取り上げられてきた編集の学習を「メディア様式」「編集プロセス」「編集技法」の三つの観点から分析し、その課題を明らかにすることとした。

過去の中学校国語教科書の記述を分析した結果、これまでの編集の学習では、書くことの力を振り返る「ポートフォリオ」としての学習、多様なメディアからの情報を活用する学習、文種やメディアごとの表現方法を学ぶ学習などの意義を重視していることが示唆された。今後の課題として、様々なメディアに共通する「編集力」の育成を目指すことや、編集プロセスにおける編集方針と編集技術との関連性を意識した学習の必要性などがあげられる。

キーワード：国語科、情報活用能力、編集工学、編集、エディターシップ

1. はじめに

1.1. 問題の所在

近年、さまざまな分野で編集という言葉が耳にするようになった。編集とは、そもそもは書籍や新聞、雑誌などを制作することを指す言葉であるが¹、現在では、画像や動画の加工、ワープロなどによるテキストの加工、コンピュータの電子データを変更することなども含めて「編集する」と言い表すことがある。さまざまな文脈で使用されるようになってきている。

また、雑誌や書籍の編集といった意味合いから発展し、広義の情報活用、情報操作として「編集」²をとらえる研究が外山(1975)、松岡(1996)らによって進められつつある。

松岡(1996)は、「編集」を人間の活動にひそむ最も基本的な情報技術であるととらえ、「編集」を「該当する対象の情報の構造を読みとき、それを新たな意匠で再生するもの」ととらえている。狭義の編集概念から、広義の編集概念として拡張し、既存の情報を加工し、組み合わせ、新たな意味を生み出す作用として「編集」を位置づけているのだ。このような広義の「編集」を行う力が、社会を生きるための能力として必要であるとして、さまざまな分野から注目され言及されてきている。³

外山や松岡らに共通する問題意識として、広義の「編集」が必要とされる背景に高度情報化社会への対応がある。大量の情報があふれる社会では、その情報におぼれるのではなく、それを主体的に読み解いて整理する必要性や、多様な情報を組み合わせて発信していく機会がかつてよりも飛躍的に増大している。そのような高度情報化社会で生きるための情報活用能力⁴の一つとして「編集」をとらえ、その力を高めることが必要であると述べるのである。

松岡(1996)は「編集工学」を創案し、編集技法を次のように取り上げている。(表1)

表1 松岡の編集工学による「編集技法」

01 収集	02 選択	03 分類	04 流派	05 系統
06 編定	07 要約	08 凝縮	09 原型	10 模型
11 列挙	12 順番	13 規則	14 配置	15 交換
16 比較	17 適合	18 競合	19 共鳴	20 結合
21 比喩	22 推理	23 境界	24 地図	25 図解
26 注釈	27 引用	28 例示	29 暗示	30 相似
31 擬態	32 象徴	33 輪郭	34 強調	35 変容
36 歪曲	37 不調	38 諧謔	39 意匠	40 装飾
41 模擬	42 補加	43 削除	44 保留	45 代行
46 測度	47 構造	48 形態	49 生態	50 焦点
51 報道	52 統御	53 道筋	54 脚本	55 場面
56 劇化	57 遊戯	58 競技	59 翻訳	60 通訳
61 周期	62 曲節	63 総合	64 創造	

※松岡『知の編集工学』より引用者が抜粋

Koki Watanabe : Trends and Issues in Junior High School Language Arts of "Edit" learning- With a Focus on Three Elements of the "Editorship"-
Graduate School of Education, Chiba University,
Attached Junior High School, Faculty of Education,
Chiba University

この「編集技法」は、テキストを読み解き、加工し、発信する情報活用能力としての「編集力」の多様性を示すものである。

このように、編集の示す意味範囲が拡張し、また「編集力」についての言及や研究も進められてきている。

国語教育においては従来から文集や雑誌、新聞を製作するという意味合いで編集が取り上げられてきた。

昭和20年代の学習指導要領(試案)⁵ではすでに編集が取り上げられている。しかし、その後、長きにわたって編集は指導事項からは消えている。平成10年版学習指導要領において編集が「書くこと」領域の言語活動例に再び取り上げられ、注目され始めている。

平成10年の学習指導要領の改訂で編集が取り上げられた経緯について、当時の教科調査官である井上(2009)は「理解し、創造するための編集の能力(エディターシップ)を支える言語能力」を指導内容として加えることにしたと述懐している⁶。井上の言う「エディターシップ」や学習指導要領で再び取り上げられた「編集」とは、前述の松岡らが述べた広義の「編集力」を念頭に置いたものである。

井上(2001)は「これからは、単一の記事や作品を読んだり書いたりするだけでなく、複合化・総合化されたメディアテキストを対象としなければならない。編集活動を行うエディターシップを育成する必要があるのだ。このような活動には、たとえば編集工学で整理される編集技法が参考となる。」と述べ、編集工学の「編集技法」(表1)を「編集力(エディターシップ)」の要素として提示している。これからの国語教育において、雑誌や新聞を製作するという意味合いで編集をとらえるだけではなく、さまざまなテキストやメディアを対象とした情報活用能力の育成という文脈で「編集力」を育成することが求められており、教科調査官である井上の発言はそれを傍証するものといつてよいだろう。

井上と同じく、国語能力としての「編集力」(エディターシップ)を位置づけているのが古賀(2002)である。古賀は、現代の情報化社会の進展により、多様なメディアが用いられるようになってきている現状を踏まえ、国語教育においても多様なメディアテキストを対象とすべきだと論じている。また、メディアテキストは多様な情報が関連づけられ、編集されて成り立っている点に着目し、情報を理解したり表現したりする力として、「編集力(エディターシップ)」の概念を積極的に導入しようと試みている。

古賀は、「編集力」を「価値創造に向けて表現したり理解したりする能力」ととらえ、その能力として三つの側面を取り上げている。一つはメディア様式の特徴を理解する力、もう一つは、そのメディア様式に応じた表現力(編集プロセス)、そして、3点目は、表現内容を生

み出すための思考力(編集技法)である。新聞、雑誌、テレビなど、メディア様式によって発揮される表現は異なる。そのメディアの表現様式の特徴に従って編集のプロセスが行われることとなる。また、編集のプロセス上にさまざまな編集技法が活用されていく。メディア様式と編集プロセスと、編集技法との三つの要素が「編集力」には関連していくのである。

「編集力」を育成するためには、この三要素を関連させて学習活動を位置づけることが必要であると論じている。

情報工学やエディターシップ概念により、情報活用能力としての「編集力」の構造が少しずつ解明されてきている。しかし、これまでの国語教育実践において、編集がどのようにとらえられ、指導されてきたかについての研究は不十分である。編集の実践そのものは、すでに昭和20年代から取り上げられている。また、編集に関連する文集や新聞制作などの実践史についてはこれまでも多くの先行研究が存在する。文集づくりについては「生活綴り方」系統の菅原(2004)の研究が、新聞教育については石川・津田(2010)によるNIE関連の実践史研究がある。また、砂川(2008)や中村(2009)によるメディアリテラシーの視点から捉えた実践の検討もあり、その中で編集の関連がみられるものがある。また近年では横田(2011)による「出版学習」についての研究や、府川・高木(2004)による「書き換え」などの編集技法に関わる実践に特化した研究もある。だが、これらの先行研究をみても、編集に関連する授業実践について「編集力」そのものを明瞭に国語教育の中に位置づけた研究はない。そこで、本研究の目的を次のように設定することにした。

1.2. 目的

これまで編集の学習としてどのような学習が試みられてきたのか、そしてその学習が「編集力」に関連するどのような能力を育てることを念頭に置いて取り組まれてきたのか、戦後の中学校国語教育を概観し、その課題を明らかにする。

1.3. 方法

古賀勝利は国語能力としての「編集力」を三つの要素でとらえている。一つめは、メディア様式についての理解、二つめは、それぞれのメディアに対応した編集プロセス、そして三つめは編集プロセスで活用される言語技術(編集技法)である。

そこで、本研究では古賀が提示した「編集力」の三要素から、編集を取り上げた学習の事例を検討する。

学習事例の概観に当たり、検討材料として、授業実践において最も広範な影響力を持っている中学校国語教

科書の記述を取り上げる。戦後の国語教科書において、編集の学習がどのようなメディアを選択し、どう「編集力」をとらえ、それをどのような視点で育成しようとしてきたか検討し、国語科において「編集力」を育成するための課題を明らかにしていく。

2. 編集学習の動向

2.1. 編集学習におけるメディア様式の傾向

まず、メディア様式の視点から編集学習を概観する。

編集の学習において、これまでどのようなメディアが取り上げられてきたのだろうか。(表2、表3)は昭和20年代から平成25年現在まで存在している中学校国語教科書五社(光村図書・教育出版・東京書籍・学校図書・三省堂)に取り上げられた編集メディアの教材採用数を調べたものである。その結果、次のような編集メディアが学習されてきたことがわかった。

表2 国語教科書で取り上げられている編集メディア

- ・文集(個人文集・クラス文集)
- ・新聞(個人・クラス・学校)
- ・雑誌(グループ・クラス雑誌)...
- ・パンフレット・リーフレット・ガイドブック
- ・アンソロジー(アルバム・名言集・作品集)
- ・ニュース番組

この編集メディアが、どの年代に、どの程度取り上げられたかを(表3)に概観する。複数学年で取り上げられる場合はその採用数を累計している。

表3 教科書で取り上げられた編集メディアの変遷

	～ S29	～ S39	～ S49	～ S59	～ H5	～ H15	～ H24
文集	9	18	11	7	8	2	1
新聞	33	38	18	5	6	5	8
雑誌	9	4	0	0	0	1	1
パンフ	0	0	0	0	1	3	7
アンソ	0	0	0	0	0	0	3
ニュー ス	0	0	0	0	0	2	4

表3から、教科書において、時代ごとに対象とする編集メディアに広がりが見られることがわかる。

昭和年代では、新聞、文集、雑誌がほとんどである。しかし、平成10年代以降、時代が下がるに従って、文集の割合が減り、パンフレットやアンソロジーの割合が

急激に増えている。テーマに応じて情報をまとめ、編集する実践が増えていく傾向がある。

また、テレビのニュース番組など、文字情報だけでなく、写真や動画などの画像情報も編集の対象として学習されるようになってきたこともわかった。

編集をするツールは、ワープロなどによるテキスト編集はもとより、動画の撮影や編集も、かつてよりは格段に容易にできるようになってきている。編集ツールの発展はこれからの編集学習に大きな影響を与えていくものと思われる。これらの変化は今後ますます強くなっていくことだろう。

2.2. 編集学習における編集プロセスと編集技法

次に、編集プロセスと編集技法の視点からこれまでの編集学習を検討する。

教科書の記述を元に、編集学習においてどのような編集プロセスや編集技法が学ばれてきたか考察する。また、編集がどのような学習の位置づけとして扱われてきたか分析する。

編集プロセスと編集技法は、編集メディアと密接に関連して機能するものである。そこで、2.1で取り上げられた編集メディア(文集・アンソロジー・新聞・パンフレット・ニュース)を選択し、そのなかにおける編集プロセスと編集技法を検討する。

検討する教科書教材は、昭和20年代から現在までの中学校国語教科書において、上述の編集メディアの学習で最も記述量が豊富であったもの、他の編集メディアの学習との差異が顕著であり、その学習の特徴を表していると思われるものを選択した。

2.2.1. 事例① 文集の編集

まず取り上げるのは文集の編集である。「中等新国語言語編⁷一年(垣内松三編)」(光村図書)の事例を取り上げる。昭和20年代の学習指導要領(試案)にある編集に準拠した单元である。草創期の編集学習がどのようなものであったか考察したい。

(1) 編集のプロセス

教科書では、「個人文集」を制作する活動が取り上げられている。自分が今まで書いてきた作文を作品集としてまとめる学習を行っている。

教材は物語形式で記述されている。教材では「ぼく」が文集を作る課題を与えられ、文集ができあがるまでの様子が描かれている。

文集として編集されるテキストは

- ・中学生になって
- ・いなかへ行ったこと
- ・お祭り

- ・私の愛読書
- ・修学旅行

などの今までに書いた作文である、また「遠足の時の写真」なども掲載することになっている。

これらの作品を集め、順番を考え、後書きを書いたり、文集の題名をつけたりして個人文集を編集していく。

(2) 指導内容と編集技法

教材では「文集はどう編集したらよいか」というタイトルで、編集をする際のポイントを説明している。

- ・一年間の記念の文集としての目的であること
- ・目次や表紙をつけること
- ・全部の内容を言い表す表題をつけること
- ・作品の順番を、内容や制作順などから考えること
- ・文集を作り上げた感想を後書きに書くこと
- ・誤字や仮名遣いを読み返すこと

このように、編集をする際の、文集の基本的な体裁や盛り込むべき内容について押さえられている。

(3) 編集学習の位置づけ

この単元は昭和20年代に編集がどのようなものとして捉えられていたか知ることができる。

この単元では、文集の編集は、自分が書いてきたものをあらためて読み返し振り返る場として成立している。

編集においては、文章を何度も読み返したり、文章を選ぶために多くの文章のなかから評価したり、選択したりという読み方をする事となる。自分の書いた作品を編集する活動を取り入れることで、自分の文章を「編集者」の視点で、客観的に振り返ることができる。

また、この教材では、文集を編集することで自己を振り返る経験の価値や意義を強調しているところが特徴である。昭和20年代の国語教育は「経験カリキュラム」とも呼ばれ、「国語についての知識を授けるよりも、まず、豊かな言語経験を与えることを目的としている」⁸ものと位置づけられていた。編集をするという経験そのものの意義や手応えを感じさせることに主眼を置いた構成は、そのようなカリキュラムデザインを念頭に置いたものなのだろう。

このように自分の作品をまとめて振り返る編集の活動は、いわば「ポートフォリオとしての編集学習」ということもできる。「ポートフォリオ」においては、いままでに学習したものを再構成して、まとめることで自己評価力を高めることが主眼となる。学習経験を再構成することに主眼が置かれる、

この「ポートフォリオとしての編集学習」という位置づけは、この事例以外にも「個人アルバム」「卒業文集」

などといった編集学習においても見られる。編集学習の傾向の一つであるといつてよいだろう。

2.2.2. 事例② 雑誌の編集

次に、昭和40年代に作文の単元として設定された『桜の本』の編集⁹と題されている教材を検討する。この教材では、雑誌の目次案と前書き、そして雑誌に掲載される文章数編が書かれている。

学習活動としては、グループで好きなテーマを設定し、それに関する情報を集めたり、自分たちで書いたりして雑誌を制作するという活動となっている。(なお、『桜の本』以外にも『星の本』『山の本』『雪の本』『虫の本』のテーマ例が示されている。)

(1) 編集のプロセス

『桜の本』は、桜をテーマとした作品集である。構成は、次の目次(表3)の通りである。

表3 『桜の本』の目次

桜の歌
詩
現代の短歌・俳句
桜の物語
花びらの旅 浜田広介
桜守 水上勉
旅と古典
花咲爺さん
〔先生の話〕 古典の中の桜
〔研究〕 和歌によまれた桜の美
桜の随想
さくらのきもの 網野 菊
サクラ (外国人)
花むすび 岡部伊都子
桜の知識
〔説明〕 植物としての桜
〔紹介〕 桜の名所・名水
〔花だより〕 桜前線
〔ニュース〕 桜百年
桜と人—伝記
桜を育ててきた人
桜とわたし—わたしたちの作文集
桜を守ろう 山口孝治
桜の絵 川田ひとみ
花びらを追う 鈴木友一
勇敢な大使「桜」 稲村京子
「サイタ」先生 森田久代
桜のつくことば
○桜色 ○桜貝 ○桜狩り
○桜もち ○桜井の駅 ○桜の園
○桜田門 ○桜がさね ○桜んぼ

教科書には次のような編集プロセスが示されている。

- ・グループで「桜」というテーマを決める
- ・さまざまな資料を探す
- ・それらを適当な長さに加工する
- ・取り上げた文章に感じたことを書き添える
- ・配列を吟味する

この単元は、作文の学習という位置づけであるにもかかわらず、自分の文章だけでなく、他の書籍からの引用が多いことが特徴的である。前述のような、自分で書いた作品をまとめる文集ではなく、編集テーマを鮮明にさせた編集の学習であるところがユニークである。

この雑誌の編集プロセスでは、とくに、編集テーマである「桜」を意識して情報を集めることが求められる。また、さまざまな文種を多様に取り上げ、雑誌の文種に広がりを持たせて編集するように配慮されている。

(2) 指導内容と編集技法

編集技法は、「桜」というテーマに沿ってテキストを探し、適切なものを選び、それを雑誌に掲載するために加工する技術が必要になる。引用の情報加工を中心とした編集の学習となっている。また、内容ごとに見出しを考え、全体の構成を考えることも編集プロセスに位置づけられている。

学習の手引きには次の記述がある。(下線は引用者)

- 一 『桜の本』に出てくる文章の種類を考えてみよう。
- 二 グループごとに、いろいろな題を決めて、『桜の本』にあるような文章を書いてみよう。

この手引きの記述から、『桜の本』の編集の学習では、多様な文種を読んだり書いたりする学習の機会として編集をとらえていることがわかる。

(3) 編集学習の位置づけ

この雑誌の興味深いところは、編集されるテキストが必ずしも自分たちが書いたものだけではないという点である。テーマに沿ってさまざまな種類の本を読み、それを組み合わせて編集する、情報活用の視点を持たせた学習である点がユニークな特徴である。

また、雑誌に掲載する内容も多岐にわたり、取り上げている文種が多様になるよう配慮している点も特筆すべきポイントである。散文、韻文という違いだけでなく、説明や紹介、伝記、随想などの多様な文種を組み合わせられている。多様なジャンル、情報を読み、それを編集して活用する学習として編集をとらえていることがわかる。

このような「多様な情報を活用する場としての編集学習」は、編集を取り上げる学習の傾向の一つとしてほかの教科書でも取り上げられている。

2.2.3. 事例③ 新聞の編集¹⁰

新聞作りそのものは昭和20年代から実践されている。また国語科にとどまらず、社会科や総合的な学習の時間、またNIEなどの教育実践においても新聞作りが行われている。本単元では、国語の「書くこと」の学習

として新聞がどのように取り上げられてきたか教科書の記述を元に考えていきたい。

ここでは、東京書籍の平成五年版教科書にある「新聞を作ろう」という単元を取りあげる。

(1) 編集のプロセス

教科書では、まず新聞というジャンルの特徴の説明から学習が始まっている。「新聞には様々な文章が載っている」とし、その文章の種類として、「ニュース、社説、書評、随筆、連載小説、短歌・俳句・投書」を取り上げている。

新聞という報道メディアの内容として「短歌・俳句」を取り上げることは、必ずしも一般的なものではないと思われる。あえて国語科の学習として、多様な文章表現を学習する場として新聞製作を設定している意図があることが推測される。

この単元では、次のような流れで新聞作りが進められている。

- 一 企画を立てる
- 二 原稿を書く
- 三 できた新聞を読む

「一 企画を立てる」の項目では、新聞製作において次の要素を検討することを示している。

- ・新聞名
- ・内容
- ・割り付け
- ・分担
- ・見出し

この単元では、とくに「二 原稿を書く」のプロセスで、具体的に説明・報道・意見などの文種を指定して文章を書かせるようにしているところが特徴的である。

(2) 指導内容と編集技法

この学習では新聞記事に書くべき内容が指定されている。「様々な種類の文章を書く」「写真やグラフを入れる」などのように制約を設定し、様々な文種を書き、多様な情報を紙面に取り入れるように指示している。

具体的には次のような文種が例示されている。

- ・「我が校の読書傾向」についての説明(円グラフ付き)
- ・話を聞くときの態度についての意見
- ・体育祭の競技に参加したことについての感想
- ・短歌の創作
- ・バスの中で見たことについてのニュース(報道文)

・ 編集後記 (エッセイ)

なお、この教材では、それぞれの文種ごとに、その特徴を理解して書くことができるように、「組み立てメモ」を掲載している。

たとえば、「グラフを活用した説明」では、

- ・ グラフがどのように作られたものかを明確にする、
- ・ グラフから読み取れる特徴的なこと、意外なことなどについて説明する、
- ・ 自分の考えを簡単に付け加える。

のように、説明を書くポイントを例示している。

また、「自分の意見を書く」ときに注意する点として、

- ・ まず、主張から書き出す
- ・ 自分の意見の根拠となる具体例を入れる
- ・ 異なる立場の人の意見を予想して入れる

のようにポイントを示す。

このように多様な文種に対応して、それぞれどのような構成で表現すればいいか手引きをしている。

また、見出しの付け方の工夫として「倒置法」「疑問形」「体言止め」などの表現技法を例示している。

(3) 編集学習の位置づけ

新聞の編集を通して、多様な文種を書く活動につながれているところがこの学習の特徴である。これは、編集が多様な情報やテキストを対象としているという一つの側面を生かしている。しかし、そのため、紙面としての一体感や、新聞の明確な編集方針は感じられない。また、複数の記事の関連性や組み合わせを考える要素も希薄である。様々な文種やメディアの活用法を学ぶことに重点を置いて新聞作りをとらえているからであろう。

この教材では、三年間をかけて多様な文種の書き方を学んで上で、そのまとめとしてこの新聞の編集学習に取り組ませている。そのことから、この新聞の編集学習は、「書くこと」学習の発展、応用的な位置づけが与えられているとも解釈できる。

平成 20 年版学習指導要領では中学 3 年「書くこと」の最終段階の言語活動として編集が位置づけられているが、この事例と同様に、編集を、多様な文種を書く力の成果を発揮する応用、発展的な学習と捉えているものと解釈できる。

2.2.4. 事例④ パンフレットの編集

1 年「映像と言葉で表現する」¹¹という単元である。この学習では、パンフレット制作の中で映像と言葉を活

用して表現する編集が行われる。

教科書冒頭は次のような言葉から始まる。

「古代の壁画に始まった人類の表現の方法は、今、新聞・雑誌・本などの活字文化だけでなく、写真・テレビ・漫画などの映像文化へと多様に発展してきた。視覚に訴える映像文化は、現代生活に欠かせない存在ともなっている。」

この単元は、国語の表現学習の中に写真、漫画を取り入れた異色の単元となっている。

学習は「私たちの学校」を紹介するためのパンフレットを製作する活動である。パンフレットには文章、写真、漫画、イラストが編集され、掲載されていく。

(1) 編集のプロセス

クラスでパンフレットを製作するために次のようなプロセスをたどっていく。

・ クラスで編集会議を開く

どのような内容にするか(知らせたいこと)

どのような方法で表すか (知らせ方)

- A 写真と文章で
- B イラストと文章で
- C 漫画で

・ いくつかの班に分かれ、課題を分担する。

- A 写真の使い方を工夫する班
- B 漫画・イラストの使い方を工夫する班

・ クラスで編集会議を開く

どのような構成にするか
 どのような述べ方にするか
 どのような名前を付けるか

・ 各班で分担した作業を整理して原稿にまとめ、それを集めてクラスでパンフレットに作り上げる。

この学習は、クラスで一冊のパンフレットを制作する共同編集の活動である。編集会議で編集方針を決め、その方針に沿って各グループで記事を書いていく。

パンフレットは「入学してくる 1 年生のために」という相手意識や、「自分たちの学校を紹介する」という目的意識が明確に設定されている。パンフレットを制作する際に、相手や目的が明確であるから、グループがばらばらになって取り組んでもある程度統一された方針で編集、制作することが可能になっている。

(2) 指導内容と編集技法

この教材では、写真や漫画、イラストを活用するように指定している。それぞれのメディアの特徴を考えるこ

とができるように学習が設定されている。

たとえば、写真メディアの特徴として「写真は、新聞・雑誌・本の中に組み込まれ、文字言語と関わる独自の働きをしている」と述べ、「作り手の心や気持ちを反映する写真は、その意図を伝達するだけではなく、受け手のさまざまな想像を引き出す可能性をも持っている」と説明している。そして写真にキャプションをつけたり、写真から物語を想像させたりという補足的な学習を取り組みつつ、写真メディアの特徴について学ばせるように単元が構成されている。

漫画について学ぶためにも、教材に様々な工夫がなされている。四コマ漫画のストーリーを言葉で説明したり、セリフの削除された四コマ漫画の吹き出しに言葉を入れてみたりという活動を補足的に取り上げ、漫画の特徴を考えることができるように配慮されている。

このような補足的な学習をして写真や漫画の特徴を理解した上で、実際にパンフレット作りに取り組み、漫画やイラストを活用した表現をしていくことになる。

写真、漫画を取り入れて表現する際の編集技術として次のような内容が取り上げられている。

- ・キャプション・副題・説明などをつける。
- ・組写真にする。(時間的、空間的な変化を表す)
- ・画像と言葉を組み合わせる効果。

このように、この編集学習では、文字だけでなく写真や漫画などの画像情報を効果的に生かす技術を取り上げている。

(3) 編集学習の位置づけ

パンフレットというメディアの特徴を生かし、文字だけでなく写真やイラスト、漫画など多様なメディアを組み合わせて表現する編集技術を学ぶ単元となっている。

編集方針や読者像が明確なため、記事に書く内容や表現方法についてより具体的に吟味することができる。編集方針に応じて、内容や編集技術を工夫しながら取り組める単元となっている。その上で、写真やイラスト、漫画など多様なメディアを活用する技術を身につけさせようとしている。

2.2.5. 事例⑤ テレビニュースの編集

学習指導要領に編集が再び取り上げられるようになったのは平成 20 年版の学習指導要領¹²においてである。最後に、この学習指導要領に準拠している教科書での実践例を検討する。

教育出版の教科書「伝え合う国語」¹³では「読むこと」の領域の教材として「メディアと表現」という系統を設定している。この学習は、理解が表現へとつながる関連

性を意識した学習が設計されている。

ここでは、そのなかで 3 年「情報を編集するしかけ—メディアにひそむ意図」という学習を検討する。

この単元は、同一の新聞記事、テレビニュースを比べて読んで編集する学習である。2009 年にあった皆既日食を、新聞記者として、または報道ディレクターとして表現するという課題を設定し、それぞれどのような点に注意して紙面や番組を編集するか考えていく。

(1) 編集のプロセス

皆既日食を報道する二つのメディア(新聞記事、テレビニュース)の構成を学ぶ活動となっている。

それぞれ次のようなプロセスをたどる。

【新聞記事の構成】

- ・新聞記事を作るに当たりどのような点を重視するか方針を決める。(例 観測できたことに重点を置くパターンと観測できなかったことに重点を置くパターン)
- ・例示された取材メモの中で、どの情報が必要か選ぶ。
- ・それを紙面のどこに置くか組み合わせを考える。
- ・写真や地図も同様に選び、組み合わせで配置する。

【テレビニュースの構成】

- ・例示された画像(カット)を選択する。
- ・カットの順番を考える。
- ・それにどのようなナレーションをつけるか考える。

(2) 指導内容と編集技法

この教材での学習は、取材過程よりも構想過程での編集を重視したものとなっている。

「メディアにひそむ意図」という副題があるように、発信者の意図を、編集された表現として、どのように反映させていくのか考えさせる学習となっている。

発信者の意図を反映させるために、具体的には次のような編集技法が活用される。

- ・取り上げる情報を選択する。
- ・文字情報や画像情報を組み合わせる。
- ・記事やカットを配置する。(空間的な配置や時間的な順序)
- ・ナレーションやリード文を付加する。

それらの編集技術を活用しながら、全体の構成を考えていく。構成を考える際に、選ばれなかった情報をなぜ使わなかったのか、その理由を考える活動が設定されている。編集の意図をふりかえり、編集の効果を考えることができるように学習が組み込まれている。

(3) 編集学習の位置づけ

この編集学習の特徴は3点ある。

一つ目は、新聞やテレビニュースといった具体的なメディア表現を通して編集を学ぶという点である。メディアを通して表現される情報は、さまざまな加工や編集がなされている。そのようなメディアの違いを意識的に考えさせようと意図した教材になっている。

二つ目は、理解と表現を関連することで、編集を学ぶということである。教科書では「読むこと」の学習として位置づけられているが、効果的な表現の方法を学ぶという意味では「書くこと」領域の力も含まれている。学習活動にはその両者を関連させた内容が含まれている。

そして3点目として、表現と理解を関連させる編集の要としての「編集者の意図」が機能しているということである。編集は、編集者が目的や意図を具体的に持っているときに発揮される。編集者が明確な意図を持った上で、編集技法を活かしてテキストを加工していく。編集意図と編集技術、そして編集されるテキスト(メディア)との相互作用を捉えさせることが、編集の学習において重要であることが、この事例から知ることができる。

2.3. 編集を取り上げた事例のまとめと課題

以上、編集の学習活動について編集メディアの選択という観点からの検討と、編集を扱った代表的な実践例を通して編集学習について検討してきた。

編集メディアの選択という点については、メディアそのものが時代によって変化すること、また編集を行うツールがめまぐるしく進歩していることにより、編集の学習に影響を与えていることがわかった。その傾向は今後ますます激しくなるものと予測される。今後は、特定のメディアやツールに対応した編集技術を学ぶことに偏るのではなく、さまざまなメディアの編集に共通する「編集力」を取り上げて、それを学ばせるように配慮すべきであろう。

次に、戦後中学校国語教科書において、編集を取り上げた事例から得られた知見をまとめる。

これらの事例では、次のような位置づけで編集学習が取り組まれてきたことがわかった、

- 事例① 書くことを振り返る場
- 事例② 多種多様な情報を活用する場
- 事例③ 文種に応じた表現の技術を学ぶ場
- 事例④ 多様なメディア表現の特徴を学ぶ場
- 事例⑤ 編集意図とその効果を学ぶ場

編集を学ぶ単元では、編集主体である学習者の意欲や目的意識が何よりも重視される。また編集を通してそのような意欲や目的意識、達成感や成就感を高める効果が期待できる。(事例①より)

また編集学習はさまざまなメディア、文種を対象とす

ることができるために、それらのメディアに応じた表現方法を学ぶ場としても有効である。(事例③④より)

さらには編集の学習を通して、さまざまなメディアからの情報を、目的や意図を持って効果的に組み合わせる力を高めることが期待できる。(事例⑤より)

編集学習においては、編集対象のテキストやメディアと、それを編集する編集者(学習者)の編集意図、さらにはテキストを加工する編集技術の、三つの要素が互いに関連し合いながら学習が進められていく。

今後、さまざまなメディアやツールに対応できるような「編集力」の学習を構想していく際には、「編集意図」と「編集技術」との関連性を意識し、その表現の効果が実感できるような学習活動を設計することが有効である。編集には編集者の意図と、それを具体的に成立させていく技術が必要とされる。技術だけを教えるのではなく、また意図のみを持たせるのではなく、技術と意図、そして編集されるテキストとの相互作用を意識させながら編集に取り組む学習が求められている。

編集は「読むこと」と「書くこと」を関連させた学習である。表現することを通してテキストへの理解を深め、理解が深まることで編集表現の精度も高まる。編集の学習では、この表現と理解の関連性を押さえ、どのように読ませるか、どのように書かせるかという方略を意識させることが必要である。具体的な編集意図を持ち、表現に向かう方略としての編集技法を明確にしたうえで、その両者を関連させた表現を学ぶ場として編集学習を位置づけることが必要だろう。

3. おわりに

本稿では、戦後の中学校国語教育における編集を取り上げた学習活動について主要なものを概観してきた。ここまでみてきたように、編集の学習は戦後様々な工夫や実践が積み重ねられてきた。その中でも、雑誌や文集、新聞の編集学習については昭和20年代から実践がされてきている。それらの実践は編集の学習をどう位置づけるかによって多様に広がりをもっている。その知見が現在の編集学習に十分に蓄積、継承され発展させられてきているとはいいたい現状がある。

今後の課題は次の二つである。第一に、編集を取り上げた学習活動について、国語教科書に取り上げられている実践だけでなく、国語科授業実践の中から発掘すること、あるいは国語教育に限定せず、メディアリテラシー教育、ICT活用教育などの観点からも実践を収集し検討することである。第二に、情報工学や情報学の知見から編集行為の理論的な検討や実証的な調査を進めることである。「編集力」はどのようなものであるか、それを中学校国語教育においてどの程度取り上げることが

可能か、それらの視点からの研究はまだ十分とはいえない。教育現場における指導方法の積み上げだけでなく、その理論的な検討や効果に関する実証的な調査をあわせて行っていく必要があるだろう。

¹ 日本国語大辞典第二版編集委員会(2001)『日本国語大辞典第二版』小学館の「編集」の記述は次の通りである。

「一定の規格のもとに、書籍・新聞・雑誌などをまとめること。また、その仕事。」

² 以後、本稿では広義の「編集」概念を指す場合は、かぎ括弧をつけて「編集」と表記し区別する。

³ 西岡、角田、藤原、川辺、菅付の参考文献を参照。

⁴ 「情報活用能力」とは、公的には臨時教育審議会(1985年9月～1987年12月)において、「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的資質」として定義されている。本稿での「情報活用能力」とは、文科省が定義する「情報活用能力」の三つの観点(情報活用の実践力 情報の科学的な理解 情報社会に参画する態度)のうち、「情報活用の実践力」に相当するものとして使用している。

⁵ なお、中学校国語科の学習で編集が初めて取り上げられたのは、昭和22年(1947年)版の学習指導要領国語科編(試案)においてである。

「作文」の「十 各学年の学習指導」の「第一学年の学習指導」において「学級文集や個人文集をつくる。」という記述がある。また「第二学年の学習指導」のなかに「学校新聞や学級文集を編集すること」の記述がある。

昭和26年改訂版の学習指導要領国語科編(試案)では、「書くこと」の「各学年の具体的目標」のなかに第一学年では「個人やグループや学級の文集を作る。」が、また、第二学年では「学校新聞を編集する。」さらには第三学年には「新聞・雑誌などの編集について、ひととおりの理解を持つ。」と系統立てられている。なお、学習指導要領が7度改訂された中で編集が位置づけられるのは、終戦間もない昭和20年代の2例と、平成10年のもののみである。

⁶ 井上一郎(2009)「新学習指導要領の理解と実践展開」『実践国語研究』2009年3月号

⁷ この教科書は「言語編」と名付けられているように国語教科書が「言語編」と「文学編」の二冊期のものである。「言語編」の教科書は「言語知識・言語技術の組織的系統的学習」のために編集されたものである。学習者が実際に取り組む言語経験を手引きし、意味づけるものとして教科書を機能させようとしたものである。(参考、山元悦子(1991)「昭和二十年代中学校国語科単元学習の考察(4):「言語編」・「文学編」二冊期の教科書単元の分析を通して」『国語教育研究』no.33 pp.131-150 広島大学教育学部光葉会編)

⁸ 昭和26年中学校学習指導要領国語科編(試案)「二 国語科はどんな方向に進んでいるか」より。

⁹ 西尾実編集(1975)『改訂標準中学国語2』教育出版 所収

¹⁰ 久保田淳監修(1993)『新しい国語2』東京書籍 所収

¹¹ 阿川弘之 野地潤家[ほか]著(1992)『中学校国語1』学校図書 所収

¹² この学習指導要領では、3年「書くこと」の言語活動例に「目的に応じ様々な文章などを集め、工夫して編集すること。」とある。また、同解説には編集の言語活動の意義について次のように説明している。

「編集する」という言語活動は、一つの文章を書く力だけではなく、いくつかの文章を書いて組み合わせることを通して、総合的に考えたり伝えたりする力を高める上で効果的である。たとえば、新聞やパンフレット、発表のための資料を編集することなどが考えられる。それぞれの形態に応じて、紙面構成を工夫したり、図表などを効果的に用いたりすることが大切である。また、複数の文章を集めて、課題やテーマに即して整理する活動も考えられる。その際、文章を一つにまとめる意図や目的を明確にして編集することが大切である。

この記述からは、編集の機能として

- ・幾つかの文章を組み合わせる
 - ・紙面構成を工夫する
 - ・図表などを効果的に用いる
 - ・複数の文章を集め、課題やテーマに即して整理する
- などの要素が取り上げられていることがわかる。

また、編集をする際には、「まとめる意図や目的を明確に」することが大切であるとしている。

この学習指導要領やその解説の記述は、国語教育で取り組むべき編集について、具体的に表そうとしているものであるが、編集の本質や全体像を十全には表していると言えないのではないだろうか。それは、学習指導要領の構成上による。学習指導要領では「書くこと」の能力を高めるという側面で編集をとらえた記述になっている点からである。本稿では「編集力」を、「情報を読み解き、組み合わせ、加工していくプロセスにはたらく力」として位置づけた。このような情報活用能力は、その本質として読むこと(理解)と書くこと(表現)の能力を関連させることで成立するものである。

編集は表現活動であるとともに、編集対象とするテキストへの理解が必要とされる活動でもある。テキストをどう加工して表現するかという表現の吟味には、テキストをどう読み解くかという要素が求められる。編集はその本質に表現と理解の関連をもつ。テキストを理解し、その理解を前提に加工して表現していく。また、表現しながらテキストへの理解を深めていくという面もある構造なのだ。そのような、理解から表現へと橋渡しをしていく情報活用のプロセスに編集が存在するのである。

「編集力」をそのような表現と理解を関連させた能力として定置し、それを分節化し定義することはまだ明らかになっていない課題の一つである。

¹³ 加藤周一ほか著『伝え合う国語3』(2013)教育出版所収

参考文献

- 梅棹忠夫(1963)「情報産業論」、『放送朝日1月号』 pp.4-17
 石川實、越田清四郎(2010)『新聞教育の文化誌—NIEはこうして始まった』白順社
 井上一郎(2001)『語彙力の育成とその育成』明治図書
 井上一郎(2009)「新学習指導要領の理解と実践展開」、『実践国語研究』2009年3月号 pp.5-7
 角田健司(1996)『創造力の掟—情報空間の編集力学』勁草書房
 川辺秀美(2010)『22歳からの国語力』講談社
 古賀勝利(2002)「国語能力としてのエディターシップ」、『実践国語研究』2002年9月号 pp.116-118
 菅付雅信(2012)『はじめての編集』アルテスパブリッシング
 菅原稔(2004)『戦後作文・綴り方教育の研究』溪水社
 砂川誠司(2008)「国語科でメディアリテラシーを教えることについての一考察」、『広島大学大学院教育学研究科研究紀要』第二部第58号、pp.113-122
 外山滋比古(1975)『エディターシップ』、みすず書房
 中村純子(2009)「戦後国語教育におけるメディア・リテラシーの位置の変遷」、『国語科メディア教育への挑戦 第二巻』明治図書
 西岡文彦(1991)『編集的発想〈知とイメージ〉をレイアウトする』JICC 出版局
 府川源一郎、高木まさき、長編の会(2004)『認識力を育てる「書き換え」学習 中学校・高校編』東洋館出版社
 藤原和博(2000)『情報編集力—ネット社会を生き抜くチカラ』筑摩書房
 松岡正剛(1996)『知の編集工学』朝日新聞社
 横田経一郎(2011)『10の力を育てる出版学習』さくら社